牧野昔ばなし

小山重夫さん（78歳、牧野本町大忠酒店）

＜その1＞

1989．4．1号

火薬庫爆発で人が増えた

ここ（牧野本町）の住宅がだいたいかっこついてきたなあいうのは、昭和十四年ですわ。ここの区画は、道路に面した方が七間で奥行きが八間、五十六坪単位ですわ。京阪手持ちの五十六坪の宅地に三軒の家を建てて、今で言う建て売りやったんですわ。土地は京阪で、上の家は香里の竹井工務店とか山之上の岡市組なんかに建てさして、売れたら土地代は京阪がもろて家の代金は建築屋がもらう、というような式でやりましてんわ。その完成が昭和十四年の四月一日で、それが三月一日に禁野火薬庫が爆発したんですわ。

その時、ここはどうもおまへなんでん。火薬庫の横に枚方工廠がおましてね、火薬庫の爆発で類焼して兵器製造所も燃えたわけですわ。工員よりも職員がよおけおったんで、軍が牧野の方は安全やいうことで、仮住まいを求めたわけでんな。それで京阪にでも頼みはってんと思うわ。そんで建った家がポッポッポッポッとつまってきたんですわ。工廠の人やから軍隊というんやなしに軍属でんな。軍属は肩にお星さんが斜めに七つついてまんねん。銀の星と白い星でしたなあ。その時分は大阪造兵廠の枚方兵器製造所いうてね、今の小松の前身でんな、そらあごっついもんでした。主に砲弾つくってましたけどな。それからボチボチと発展して、これだけつまってきましてんわ。

綿とイモと

昭和十四年頃、この辺は区画整理はしたるけど、ほとんど荒地でしたからねえ、歯科大学の軍事教練場みたいなもんやった。古い人は知ったはりますわ。向かいの学校（関西医大）かて、いちばん西に南北に建ってた校舎、今はもう姿はないですけどね、外壁はないし養父（やぶ）山の向こうの家が見えましてん。

だいたいもともとは綿とイモと畑でしてんわ。綿もよおけつくってやった。今思たら、河内木綿の原料に売ってはりましたんやろなあ。商店街、住宅いうても、そのまわりは荒れ地や藪や畑ばっかりで、道も細うてね、追いはぎが出るとかいうて、物騒な所でしてん。

みんな井戸でした

その頃、電気はきとったけど水は井戸でしたなあ。井戸、まだ使てますわ。新しい本町の住宅も最初はぜんぶ井戸でしたわ。一軒一軒、つるべで、みんな丸いおっきい井戸でっせ。三間半ぐらいの深さで、掘らはる職人は三日ぐらいで掘ったはりましてで。

井戸の中に入るのは気持ちわりいな。井戸の底で仕事なんかでけんわ。上からひもぶら下げて箕の中にゴミ入れて、ひも引っ張るんや。ちょっとちっさいしずく落ちてもビヤーンて鳴るし、物言っても響くし、何ともかんとも言えんのや。水はきれいな冷たい水や。水の道がおましたのやろ。うちかて今も使い水は井戸の水でっせ。井戸の底ってどないなってるんやろな。冷たいきれいな水が、何ぼでも出てくる。水通ってる道があんのやろな。

店を持つ

昭和七年にここで開業した頃、本町一丁目、二丁目の住宅地で二十軒ぐらいでしたね。酒屋よりも、いちばん初めは、住んでいただいてる人が不便ですよってねえ、何もかもだ。とにかくいろいろ扱いました。履物から文房具から化粧品から。

開業して二、三年して、この土地に来た人が身寄りに手紙の連絡でもしやるやろと思ってポストが必要や思て、ポストの申請に行って設置しましてんわ。その当時はなかなか許可になりまへんでなあ、牧野の郵便局はできてませんよって、枚方の郵便局まで許可もらいに行きました。枚方の郵便局いうたら、東口駅（今の枚方市駅）の西側、倉紡に行く道の南側にあったんですわ。

タバコも昭和十二年ぐらいに許可になって、切手も許可取って、塩も取って、食料品も野菜も、魚もちょっと置いてました。もう何屋いうことおまへんわ。ここに来たらちょっとひと通りととのうなあというふうに、まあ便利屋でんなあ。

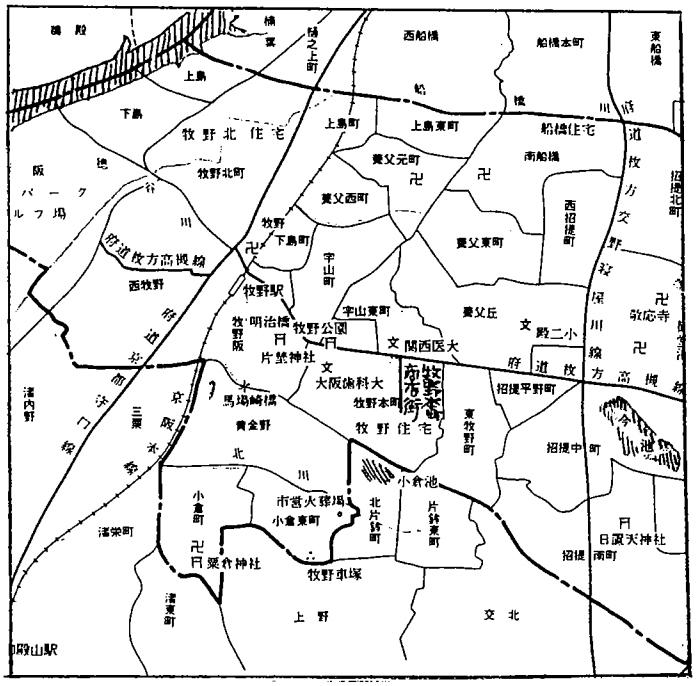
魚いったって生やおまへんからなあ。その時分、毎日大阪の天満市場へ買い出しに行きましてな、電車で。大きい一反風呂敷に何もかも包んで、駅からは背負うて……。

リヤカーで行商

私も、ここの家の数だけでは商売できへんよって、天満市場で仕入れた乾物積んだリヤカー引っ張って、ずっと行商に歩いてましてん。だいたい牧野の駅降りて、下島行て宇山へ上って、養父へ下りて、南船橋行て招提行て、ほで（それで）峠、幣原もずっと回ってましてん。

ほいで面白い話になるけどね、秋になるとアミの塩辛言う

て、エビの小さいのんの塩辛がよう売れますねん。峠辺り行ってこっち帰ってくる途中で日暮れますやん。暮の道、リヤカー引っ張って戻ってきますやん。そしたらシャッシャッシャッシャッと鎌で田刈りしてるような音したるなあと思て、○○さんとこやなあ思て、「しっぽりやってはんなあ」「重ちゃんかいな。お前も遅いやないか」「峠行たら遅なってもて、苅ってる音してるよって、誰やってるんかいなあ思て見



に来てん」「そらおおきに」「何しててん」「もうこれから帰るねん」「アミ塩辛残ってるのん買うてんか」「欲しいけどいれもんないなあ」「いれもんこしらえるわ。ちょっとこの小芋の葉二、三枚もらうわ」言うて芋の葉もらって、藁でちょっと包んで渡したもんでした。そんな幼稚なもんでした。この塩辛は、ごはんにかけて、そのまま食べますねん。

商売敵を出し抜く

この歩くのは、三ケ所ぐらいが一日仕事ですわ。一軒一軒回らなあかんよって。だいたいこれぐらいやなあと思うだけ買うてきて、それをはいてしまわな傷みますやろ、どうしてもそれだけはくようにしますねん。

ところが、ほかにも回っている人がいますねん。商売敵……。それがおもしろおますねん。水月庵ておますやろ。あの辺、道が一本道でんねん。今はよおけ建ってまっせえ。その時分は道の両側だけですわ。こっちの方からわたいが行きまっしゃろ、向こうから八幡の魚李さんいうのが回ってきまんねん。それがわかったら、わたいが先に向こうの奥に行きまんねん、機先を制しに。ほたらね。魚李さん来たら、「もう大忠さん回って来はった」言うて、「あ、南からもう回ってきはったんか」思て引き揚げるわけや。ほたら一人舞台になりまんねん。いつもそういう術でやってましてん。こっちか

ら順番に行たらガッチンコしまっしゃろな、ほいで先に向こうから入りまんねん。戦争や。面白いことでしたなあ。

地道な生活でした

肉屋もよう八幡から自転車で回って来ましたなあ。ここいら肉屋なかったよってここらまで来はった。ちゃんと竹の皮に包んで、ここの家は何百匁ぐらいいうて包んで、呉服でも八幡から来とった。呉服商もおまへなんだよってな。

五日か一週間分ぐらい買うてもうてね、生やのうて塩干物やよって日持ちしますやろ。季節季節のもんですわ、冷蔵庫なんかおませんよってね。肉なんかすぐ食べないかんけど、月に一回ぐらいや。経済が許さしまへんよって、小芋のたいたのとかね、ネギとちょっとたいて食たぐらいのことですわ。こんなんなったのは終戦後ですよ。戦前はそんなことできしまへん。自分とこのニワトリ殺すぐらいのことですなあ。昭和二十年以前は、地道なもんでしたわなあ。

売れん時は重い

リヤカー引いてた時の服装は、厚子いうてねえ、何ちゅうか、袷して帯締めてねえ、足は草履はいたり、まあ靴もおましたけどなあ、布の足袋はいて。うちら、いまだに足袋はいとる。厚着はしいしません。身体使うよってなあ、自転車のうしろにコマつけて荷物積んで、そら、えろおまっせ。リヤカーに三十貫（約百十キロ）積んで、重かったでえ。道路も違う。アスファルトやない。ひもつけて肩にかけて、ハンドル持って歩いとったんや。それで坂道は登らなあかんし、よう売れた時はどんどん減ってくよって軽なる。売れん時はかなんなあ。重い。

婦人部と話つけて

招提の村は皆農業で、百八十～二百軒でした。行商してる人はおませなんだ。昔としては大きい部落でした。養父、宇山、下島、片鉾と比べても大きくて、わりと豊かでした。私も出は招提で、末子でしたよって二十歳の時に独立して、店を持ったわけですわ。

高野道の村（今の一丁目）、商売に何ぞええ方法ないかいなあ思て、婦人部に話しましてん。集金率がええように月末に日を決めて集会所借って、その晩太鼓叩いて回りまんねん。「大忠さん集金に来はった」いうて、皆寄ってきまんねん。長机借って注文聞いて金もうて、「使てくれなはれ」いうて三分程婦人部に還付しまんねん。そうすっとね、買う率もよう買うてくれはるしね、集金の率もよろしいねんわ。今もう八十歳ぐらいのお婆さんですわ、知ってくれてはる人は。二、三人しかいやらしまへんやろな。

（続く）

牧野昔ばなし

小山重夫さん（78歳、牧野本町大忠酒店）

＜その2＞

1989. 5. 1号

酒も醤油も四斗樽

酒屋の仕事もえらい仕事だっせ。私は、そうでんなあ、五十五歳ぐらいまでやってました。あれも慣れですわ。醤油なんかの四斗樽、私ら若い時は、一般の家庭でも四斗樽買いまんねん。四斗樽はほとんど船で大阪の方から上ってきますねんわ。四斗あったら、家族三人なら一年半ぐらいあると思いますわ。今みたいにビンで買わんかて、樽でっさかいな、キリキリッと栓を開けて……。その四斗樽かて素人が思う程重いことあれしません。欲といっしょだすよって、こたえませんわ。

だいたい酒で二十三貫（八十六キロ）ぐらいですわ、四斗で。酒は二升一合で一貫目やから、目方に二・一掛けたら升目が出まんねん。それと樽の目方があるわけだ。これが酒屋の算定方法ですわ。

塩も叺入りですわ。雨が続いたら塩がじとっととけてね。今みたいに精製してへんよって、色がついとった。

戦争でいったん廃業

酒屋やってて、昭和十三年ぐらいから統制が入りましてんわ。酒は年間三十石以上売ってなんだらあかん、ていう規定ができましてね。最初は十石だったのが逐次強化されて二十石になって三十石、年間三十石ていうたら、その時分、よっぽど専門に売ってなんだら酒売られしまへんねん。酒は主食の米が原料ですよってね。いちばんに規制が入ったわけですわ。

だんだん戦争が激しくなってきてほとんどがチケット制度になってきましてな、もう商売してられへん。そこに徴用がきましてね、召集でなしに人間の徴発ですわ。軍需工場に人手をとりまんねんわ。遠いとこかなわんてなこと言われしまへんやろ、それで自発的に商売廃業して軍需工場行きましてん。昭和十三年ですわ。ほんで三年程してたら召集きましてん。ほで北支（中国北部）行って、終戦のあくる年の五月七日に帰ってきました。北支は山西省でした。歩兵の軽機（軽機関銃）の射手で、危ない捨て駒や。いちばん前線ですわ。

商店街つくろか

二十一年五月に復員してきて、元の商売に復帰せやないかん。商売人も少ないしね、だんだんだんだん物資も回ってくるようになって、六人程行商してるもんがいましたさかい、「商店街つくろか」言うて、ぼちぼちやりかけましてね、現在では加盟店が六十四、五軒になってますけどね。

当時は何とかせやないかんというので、商工会議所……いうても、その当時は商工会いう名称でした……相談に行ったら、大阪市の産業能率研究所ていうとこに地域診断の専門家がいはるから、実地にみてもうたらどや、いうようなことで、来てもらって、みてもらったんですわ。

散髪屋がない

そしたら、地元もちょいちょいと発展してきたんやけど、散髪屋がなかったんですわ。牧野公園の向こうの、ちょっと入ったとこに散髪屋がおましたけど、そこにしかおまへなんでん。ここらに住んではる人が子供二人ぐらいいて、連れて行こか思たら、月に二日ぐらいはつぶれてしまいますねん。そういう声が強なってきたんと、お客がすけないというのでそういう事を専門家の人に相談しましてん。

「野市をせえ」

ほたらね、ずっと向こうの農村の美濃山（現八幡市）やとか峠とかね、今の企業団地でんな、あこらの農家がこっちへくるようにしたらどうやと。つまり土着の住民が流れてくるようにせえというわけだ。「そんなことちょっとできまへんで。どういう具合にしたらええ？」。したらねえ、「野市をせえ。散髪屋の経営と野市を商店会でやったらどうや」と。「ほならやろか」ということで、商売人が相談して、野市は百姓家の残ったもん持ってきてもうたりしてやったんですわ。

それがねえ、ようはやりまんねん。百姓家さんも、ちょっと小銭がほしいなあ思たら、持ってきまんねん。持ってきた人から一割もらいまんねん。買いにきた商売人からも一割もらいまんねん。二割入りますやろ、もうかりまんねん。

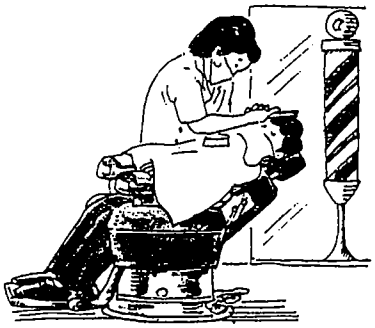
市場ができた

こんな余分の仕事でもうけたらあかんよって、これを買い子の商売人に五分戻して還元したげて、百姓家はんにも肥料か何かで還元したげて、ほで、おおかた三年程やってましたかなあ。野市は、みんな当番回りまんのや。ほたら自分の商売止めといて市へ行かなりまへんねん。勘定しに。こんなこといつまでもするのはかなんなあ、いうのん出てきまして

な。それで岸本はんが「わし一人に任してくれるか」言うて「こんな希望があるがどうや」とはかったら、「ええやないか、おんなじ会員やし任したらどや」……ほで任しましてん。それが牧野百貨ストアになり、今のメルカードになってまんねん。昭和二十五年ぐらいでしょうなあ。きっちりした記憶はないですけど。

やっと散髪屋が店開き

散髪屋も経営のしかたがむつかしおましてなあ。初めする時は首に巻く紙を勘定したら客の数が計算できると、簡単な気持でやりましてん。それが、なかなかうまいことといきまへんのや。散髪屋も、雇うのは職人でっしゃろ、うまいことといきまへんのや。



ほで、困ったなあ、やっぱしむつかしいもんやのう……ということで、石鹸の減った数でもうまいことといかん。それで思いついて、今やったはるメトロの赤沢はんがね、大阪心斎橋のメトロていう散髪屋に通ったはりましてん、片鉾から。それがわかったんで、片鉾の自宅へ頼みに行たら、「私も通うのんが楽やし、いっぺん向こうの主にもそう言うわ。にわかにやめる言うたら弱るやろから」て。ほしたら「後継者ができたら結構です」いうことで、やってもろたのが今のメトロですわ。散髪屋もなかったら不便でんなあ。月にいっぺんか二へんぐらいのもんですけどな。不自由なもんですわ。

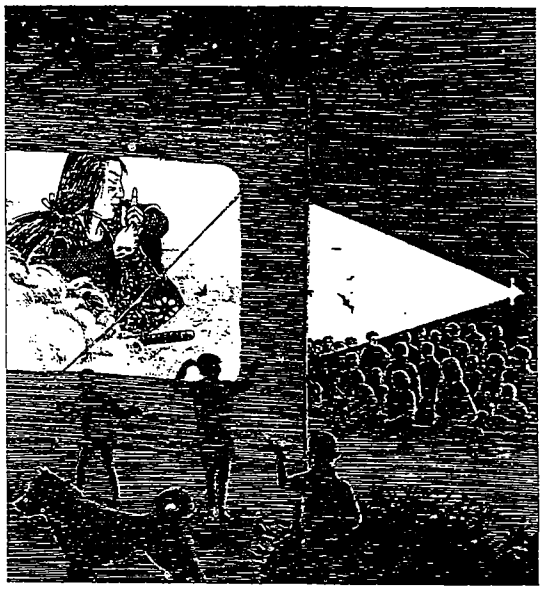
それと産婆さん。産婆さんのお世話するのんでもね、招提の柿ノ木さん、あこに頼みに行きましてん。ないとかないまへんでえ。今はなあ、散髪屋も便利になって楽やし、お医者はんも病院も、さっささっさ行けるようなって、楽なこっちゃ。

ここらに大きい病院なんかあらしませなんだ。往診来てくれはる町医者はおましてん。〝このみや〟ていうスーパーの横に大野病院て、今御主人は枚方で歯科やったはりますわ。お母さんが女医さんで内科やってはりましてん。元気なもんでしたが、女医さんは。

今はもう、商店も皆成功してくれたはるしね。寄り合いかて、つかみ合いの喧嘩するぐらいやりましてん。それぐらい熱入れて意見交換しましてん。前向きにきつう進む意見とね自重してゆっくりいく意見と分れまんねん。前向きに進むというと金がいりまっしゃろ。それがためにね。

映画の撮影所が台風で倒産

第一映画社いう撮影所があったんですわ。御殿郷（今の招提大谷の山手）に。これが伊勢湾台風でこけましてん。映画二本撮影しました。『叫ぶ荒神山』、主演は近衛十四郎、もう亡くなりましたけどな、松方弘樹のお父さんですわ。近衛十四郎の奥さんは、白井千太郎いう監督さんの娘さんですわ。女優が山本絹代かな、剣劇の師範代の役者が田代友之助。今、医者とパン屋がおまっしゃろ、あそこに集会所みたいなんがあって、そこに住んでましてんで。



戦後、学校の校庭でよく映画会があった。
招提大谷には、撮影所があった。

映画二本完成したけど、台風で資金繰りつかんようなって……。撮影所に醤油や酒を入れてたから、しょっちゅう行ってねえ。タイトル書く伊藤なんとかいう人もいてました。その頃はトーキーやおまへんやろ、黒い厚紙に白墨でしゃーと字書いて、それフィルムにうつしまんねん。

撮影かて幼稚なもんでしたなあ、今のテレビなんかとくらべたら。線を十尺程引いてね、撮るのは台車の上に撮影のカメラ組んで、向こうにタイトルの字を立てて、近寄りながら映すとおっきい映りまんねん。今はもう跡形もない。

酒代もこげつきました。豆腐屋も困ってはりましたで。阪の芋寅さん（屋号）、百姓家さんの芋を買い取って出荷してはって、後で豆腐屋しはりましてん。撮影所にずっと入れたはりましてん。一緒にツケもらいに行ったことあるわ。芋寅さんと。うちと二軒やったんですわ、ツケ残ったの。

お巡りさんと酒を飲む

歯科大のあこに、駐在所おましてん。その時分は駐在所やよって、家族が住んでましてん。主人の巡査が外回りしてたら、電話番は奥さんがしはりますねん。今の警察は楽ですわなあ、八時間でっしゃろ、勤務が。駐在所の時分は昼夜兼行だんが。みんな顔知ったるから、はよつかまる。今の巡査は普通の人に接近しやしませんやろ。駐在所は家族がいて親父

が外回ってるよって、何かあったら「こんなん見たか」と聞いて、酒も一緒に飲むしねえ。巡査と一緒に何ぼ飲んでもよかった。今はちょっと具合い悪いやろなあ。

嫁入りでも出てましたなあ。近所づき合いもしてますし、葬式も出てましたなあ。住民と一緒だ。今は交番になって、そういうのんは失われてしもたなあ、警察も。晩の警戒やったら犬連れてねえ。「あんた、その犬なんで連れてなはんねん？」「いや、これ夜やったらようわかんねん」、先歩いてて、犬吠えよったら見に行く。つながんと、ほっ放しや。

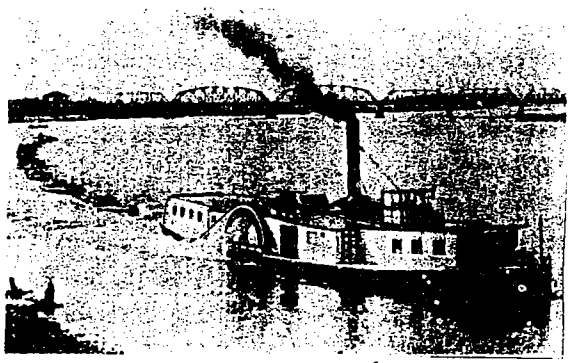
ようコソ泥を挙げはったわ。犯人はよそから来て、空巣でんな。朝一番電車から三番電車ぐらいまで牧野駅に張ってね、何番の電車に誰々が乗るいうてみんなわかってまんねん。顔見知りやないのんおったら、ちょっと尋問したりしてね、よう挙げはりましたで。

蒸気船

高野道の向こうに「四人山」があった。四軒だけ家があって、今はもうあれへんけど、焙烙製造してはりましたわ。豆専門の鍋ですわ、土の。そのうちの一軒が山本食堂いうて、タバコ屋してるとこですわ、一丁目で。

淀川へは、溜りに魚釣りに行きましたな。若い時。渡しがおましたな。まっすぐ行ったとこに「下島の渡し」。下島の渡しの浜は、古おましてんで。穂谷川の北っかわの堤防をずっとまっすぐ行くと「前島の渡し」がおましてんわ。前島の渡しの方がずっとおっきおましてん。

昔の方が、淀川の流れの水も多かった。水車のついた蒸気が通ってました。両脇にね、水をかく水車があって、水かいて上っていった。下っていったらな、空の舟をつないでずーっと曳いて上って、中書島の浜まで行ってましたわ。自動車がひんぱんになる前には、川運送が主でしたんやろ。



淀川を上り下りしていた蒸気船（外輪船）

枚方の浜いうたら、三矢の月見坂のとこやってん。倉紡のとこ信号おますやろ、あこをとんとんと下りたとこが枚方の浜でしてん。ちょっと下っていったら鍵屋がおまんねん。枚方の浜はおっきおましてんで。

新婚旅行はなかった

家内も招提の出です。小さな時から顔見知りですわ。親戚

の年寄りが何かの用があった時に、「お前いくつになってんねん。もうそろそろやな」いうて、会わしてしまいまんねん。ほんでちょっと見合いということでね、そんなもんでしたわ。新婚旅行なんておまへん。宝塚行ったぐらいでんなあ。そのぐらいのこってっせ、わたいらの時代は。こないだ婆さん連れてアメリカ西海岸行きました。日本語で不自由おまへんなあ。旅行屋も、そういうホテル予約してまんのやなあ。電話かて日本語で言うたら、交換が日本につないでくれまっせ。

（了）